参考資料２

第２回教育・文化ふくい創造会議　議事録

□日　時　　平成１９年９月４日（火）　　１０：３０～１２：２０
□会　場　　福井県庁７階　特別会議室
□出席者　　岩下委員、黒木委員、小松委員、佐野委員、左巻委員、祖田委員、長谷委員、広部委員、吹矢委員、吉岡委員（１０名、五十音順）
　　西川知事
□事務局　　伊藤教育庁企画幹、加藤教育庁企画幹（学校教育）、山内教育政策課長、前川学校教育振興課長、中島高校教育課長、髙橋義務教育課長

○開会

教育政策課長　本日は大変お忙しい中、第２回目の「教育・文化ふくい創造会議」にお集まりいただき、誠にありがとうございます。
　まず、開会に当たりまして、西川知事からご挨拶を申し上げます。

○あいさつ

西川知事　皆さん、おはようございます。今日はご多忙の中、第２回の「教育・文化ふくい創造会議」に委員の皆様方にはご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。
　さて、現在、国の中央教育審議会におきまして、小・中・高等学校の教育課程の見直し作業が進められております。８月末には、小・中学校の新しい学習指導要領の素案が示され、毎日のように、新聞でそういう様子も出ているところであります。
　文部科学省は、本年度内の学習指導要領の改訂・告示を目指しており、もし、そういうことになりますと、２１年度から一部、それから２３年度からは全体が実施されるというようなことがあるかもしれません。その中で、授業時間数の１割増加、あるいは英語教育、そのほかいろいろな項目が書いてあるように伺っております。
　この創造会議では、今回、「教員の指導力向上策」、「理科・数学教育の充実」をテーマにご議論いただいており、こうした国の教育再生の動きと少し重なる部分、あるいは連動する部分あると思いますが、あくまでも、福井県の立場でご議論を願い、必要なものは、国にご要請をしなければなりませんし、福井県として、国の制度はベースにあると思いますが、独自で、まさに取り組まなければなければならないものもあると思いますので、十分いろいろな環境を見ながら、専門的なお立場から、ご提案いただきますようにお願いしたいと思っております。
　簡単ではございますが、一言ごあいさつを申し上げた次第でございます。

○委員紹介

教育政策課長　それでは、本日、はじめてご出席いただきました委員の皆様方を紹介させていただききたいと思います。国立教育政策研究所教育政策・評価研究部長の小松委員でございます。同志社女子大学現代社会学部教授の左巻委員でございます。若狭ものづくり美学舎チーフ・ディレクターの長谷委員でござい

ます。
　なお、スポーツプロデューサーの三屋委員におかれましては、都合により欠席となっております。
　それでは、祖田座長に議事進行をおまかせしたいと思いますので、よろしくお願いします。

○議事

祖田座長　　それでは、こちらの方で進行させていただきたいと思います。本日は、大変お暑い中、また、ご多忙の方ばかりで、東京、京都など遠方からお出でいただきまして、ありがとうございます。
　それでは、早速、議事に入りたいと思いますが、本日は、今回の会議の協議事項といたしまして、「教員の指導力向上策」それから「理科・数学教育の充実」の２点につきまして、当創造会議といたしまして「こういうふうにしていったら」という取りまとめの方向性を考えていただきながら、前回に続きまして、自由に意見交換をしていただきたいと思っております。
　お手元に、資料１「取りまとめの方向性」、それから資料２「委員からの提案事項」が配付されております。
　短時間で言い足りないことも多いのではないかと思い、私の方で、こういう方法を提案させていただきましたが、文章、あるいは電話でも何でもいいので、お気づきになったことをすぐに事務局の方にお知らせいただきたいということでお願いいたしておりましたところ、その回答をいただきました。
　「資料１」でございますが、皆様からいただいたご意見・ご提案を、事務局の方で整理していただいたものでございます。それから、「資料２」につきましては、皆様から書面でいただいたご意見・ご提案を、そのままコピーをして、お配りいたしているものでございます。
　それでは、まず、「資料１」につきまして、まとめていただいたものを事務局の方から簡潔に説明をしていただきまして、その後、「資料２」を参考にしていただきながら、皆様からいろいろご意見をお伺いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
　それでは、事務局の方から、説明をお願いいたします。

加藤企画幹　　それでは、お手元の「資料１」をご覧いただきたいと存じます。
　この前の会議におきまして、論点１といたしまして、福井の子どもたちに身に付けさせるべき力ということで、小学校では「意欲」、「社会性」を中心にし、中学校では「学ぶ意義」と「生きる目的」など、社会達成意欲を高め、確かな学力を身に付けさせるべき。また、語彙の豊富な子どもたちに、あるいは「予習、授業、復習」の学習のリズムを、などなどご意見をいただきました。
　そこで、点線の中でございますが、具体的に、引き続きご意見・ご提案を頂戴したい事項としてまとめさせていただいております。「総合的な学力」とは、また、学力の基礎・基本となる力を伸ばすための具体的な方策につきまして、引き続きご意見を頂戴したいと存じます。
　次に、「総合的な学力」の向上策でございますが、学力向上のために、一つのことを学校全体で取り組むべきではないか、臨時任用講師は非常勤やＴＴ（ティーム・ティーチング）として経験を積み、試験を受けて教員へとランクアップしていくべきではないか。
　次に２ページをご覧いただきたいと存じます。退職教員の活用方策を考えるべきではないか、などのご意見をいただきました。そこで、学校現場にお

きまして、退職教員の協力を得て実施すべき対策の具体案につきまして、引き続きご意見を頂戴したいと存じます。

これからの教員に求められる資質・指導力でございますが、教員には「教師力」、「授業力」、「人間力」、「マネジメント力」といった基本的な資質や能力が求められるということで、いろいろとご意見を頂戴いたしました。そこで、３ページ目でございますけれども、本県の教員に求められる資質・指導力について、さらにご意見を頂戴したいと存じます。また、教員のモチベーションを高めていくための方策など、お願いしたいと存じます。

次に、教員の評価と顕彰・技術認定でございますけれども、プラス思考の教員政策を行ってほしい、また、部活動中心から授業中心への価値観の転換が必要ではないか、などのご意見をいただきました。本県では、「ふくい優秀教職員表彰制度」や「授業名人」を実施することになっている訳でございますが、改善すべき点、あるいは研修実績等を記録するキャリアパスなどを導入する上での課題などにつきまして、ご意見を頂戴したいと存じます。

次に、教育政策の成果、「総合的な学力」を測る指標でございますけれども、どのような指標で把握していくのがよいか、ご意見をお願いしたいと存じます。

家庭・地域の教育力の向上についてでございますが、「我が家のしつけ３原則」であるとか「０歳児から５歳児までの子育て研修」の受講が必要ではないか、などのご意見をいただきました。家庭教育に対する支援策を充実していくための具体策について、お願いしたいと存じます。

論点２でございますけれども、授業研究を柱とした校内研修を充実すべきではないか、生徒の悩み相談や学級経営のための研修を、などのご意見をいただきました。学校現場におきまして、すべての教員が互いに学び、支えあうことができる、そういう実践の導入はどうしたらいいか、などについてお願いをしたいと存じます。また、校外での研修成果の共有化についても、ご意見をお願いいたします。

次に、子どもたちと直接向き合う時間、授業研究の時間を増やすについてでございますが、このことにつきましては、第二次の協議事項として「学校マネジメント改革」を予定しておりますので、その場におきまして、集中的にご議論いただく予定でございます。

次に、論点３でございますけれども、県の教育研究所等の研修カリキュラム・体系、組織体制等について、いろいろご意見をいただきました。また、教員採用前研修、教員養成の充実についてもご意見をいただきました。本県におきましては、約５パーセントを占める臨時任用講師の指導力向上に向けて、具体案をどうしたらいいのか、などご意見をお願いしたいと存じます。また、採用後研修の充実についてでございますが、管理職、中堅教員の段階から充実すべき研修の内容、あるいは、県内外の研修機関等における研修の充実についても、引き続きご意見を頂戴したいと存じます。

続きまして、７ページでございますが、論点４でございます。教職大学院等との「共動」による教員指導力の向上につきまして、いろいろとご意見を頂戴いたしました。福井大学教職大学院、あるいは、それ以外の県内高等教育機関との「共動」により、教員の指導力を向上させるための具体案につきまして、引き続きご意見を頂戴したいと存じます。

次、９ページでございますが、理科・数学教育の充実についてということで、論点１でございますが、理科・数学を好きになってもらうために、どこに焦点を合わせて授業をつくるかが非常に難しい。中学校では理科・数学の好きな子を増やし、高校では学力を向上させるというのも一つの考え方では

ないか。また、全体の底上げについて考える部分と、数学・理科をベースとする分野で活躍する個人が輩出される部分とで、考え方を分けるべきではないか。また、教科書の発展的な内容も全員に学ばせるべきではないか、などなどのご意見をいただきました。理科・数学に関する興味・関心、基礎学力の向上、受験学力の向上との兼ね合い・バランスにつきまして、どういうふうに考えていったらよいのか、引き続きご意見・ご提言をお願いしたいと存じます。

続きまして、１０ページをご覧いただきたいと存じます。基礎・基本をしっかり習得させるための教科指導法でございますけれども、数学・理科については、シラバス・体系について、小・中・高の先生がそれぞれに理解しておくことが必要ではないか。小学校の高学年の算数は、数学の免許を持っている教員が担当する、あるいは、中学校の理科の免許を持っている者が小学校の理科の授業を担当する、あるいは、中学校においては実験助手が必要ではないか、などなどのご意見をいただきました。そこで、ご検討いただく事項でございますが、発展的な内容や理科・数学の原理を子どもたちに分かりやすく教える教授法の改善につきまして、ご意見をお願いしたいと存じます。

続きまして、理科実験の効果的な実施についてでございますが、１１ページをご覧いただきたいと存じます。実験を通じて、興味・関心、学力向上に結び付けていくには、どのような視点・やり方で進めるのか、実験のやり方について工夫する点、また、理科実験が苦手な教員に対する具体案につきましても、ご意見をお願いいたします。楽しく、分かりやすい理数教材の開発につきまして、教材開発のポイント、あるいはその活用についての工夫につきましても、お願いしたいと存じます。

続きまして、論点の２でございますけれども、大学進学のための理科・数学の学力向上ということで、物理、化学、生物の理科の３科目を履修する回路を作るとよいのではないか、また、高校段階では、ＳＳＨ（スーパー・サイエンス・ハイスクール）、ＳＰＰ（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）などの事業に参加をすると効果的ではないか、などのご意見をいただきました。そこで、１２ページでございますけれども、点線の中でございます。高校において、受験学力の向上に向けた具体案、また、ＳＳＨ実施校の実践を他の高校に広める具体案につきましても、お願いしたいと存じます。

また、その下でございますが、理科や数学に興味・関心のある子どもたちの能力を更に高いレベルに引き上げるための具体案、あるいは、就職のための理科・数学の基礎学力の向上策につきましても、引き続きご意見をお願いしたいと存じます。

最後に、論点の３でございますけれども、「ふくいサイエンス寺子屋」、「ふくいサイエンススクール」の実施につきまして、ご意見をいただきました。そこで、１３ページでございますが、子どもたちが身近に・いつでも・楽しみながら学ぶというコンセプトで、地域におけるサイエンス学習環境をどう整備していったらよいか、また、理科・数学のマンパワーの確保のための具体策につきまして、いろいろご意見・ご提言をいただきたいと思います。

駆け足で申し上げましたが、どうぞよろしくお願いいたします。

祖田座長　　ありがとうございました。この後、皆さんから自由にご意見を頂戴したいと思いますが、大体１２時１５分ぐらいを目途といたしまして、１時間半ほどございますので、皆さんからご意見をいただきたいと思います。

ただ今、説明にもありましたように、資料１の「具体的な検討が必要な事項」ということで、できるだけ「このようにしたら」というふうな具体的な

形でのご提案をいただければ、大変ありがたいなと思います。

また、「資料２」といたしまして、先ほども申しましたように、書面でいただいたものがございますので、適宜、これを活用していただきながら、発言していただければと考えております。そこにお書きいただきましたこと以外につきましても、触れていただければと思います。

それでは、まず、前回ご欠席でございました３人の方が今日ご出席いただいておりますので、その委員の方から、まず、ご発言をしていただければと思いますが、よろしゅうございますか。

それでは、まず、小松委員の方から、お願いできますでしょうか。

小松委員　　私は、今、文部科学省の国立教育政策研究所というところでいろんな調査研究をしております。私が直接関わっているものもありますし、それから研究所としてやっているものもあります。

先ほど、知事からお話がありました学習指導要領の基本的な骨子は、私の研究所の「教育課程研究センター」というところで作っているものでありまして、それから、今年の４月に全国的な学力調査をやりましたんですけれど、これも、私の研究所の方で、問題を作ったり、分析をしたり、今月中に発表するということがほぼ決まっております。それから後で、どなたかの委員の方からご発言があると思いますが、例の国際学力調査ＰＩＳＡの調査も私の研究所でやっておりまして、これも今年１２月に新しい調査のデータが公表になる予定で、しかも、この委員長は私の同僚の部長がやっておりまして、我々は冗談半分に「もう結果が分かっているんだから、ちょっと、こっそり教えろ」というようなことも言っているんですけれども。確か、１２月の第１何曜日かに発表になるようでありますが、それは、２番目のテーマの理科・数学に関わる学力といいますか、その辺のことの問題であります。

最初の論点１に関して、今、座長から「具体的な」という話がありましたが、学力の定義について、あまり哲学的といいますか教育学的な議論を、私は、自分が言うのもおかしいんですけど、教育学者たちは言葉のもてあそびがすごくあるし、文科省でも、中教審でも、使い方については何かどうとでもとれるような言葉遣いがたくさんあるので、私は個人的にはあまり好きじゃない。

例えば、「確かな学力」という言葉を使うんですけど、「確かな学力」が何かということは、私はよく分からないと言うんですね。あれは英語版を見ると、実は「アカデミック・アビリティー」と書いてあって、こっちの方がよほど分かりやすいんですね。「確かな学力」は要するに「アカデミック・アビリティー」なんですね。いわゆる、基本的には「測れる学力をちゃんと付けさせようよ」ということだ、と私は理解しています。もちろん、それを広くとったりして、人間的な「人間力」であるとか「言葉力」であるということを付けるのが流行っていますけれども、それはそうとして、私は、県の仕事としては、特に義務教育段階の学力をどう付けるのか、それから後の後期中等教育の高等学校の学力をどう付けるのかということは、少し丁寧に切り分けてやった方がいいと思っています。そういう面では、福井県の方で「総合的な学力」と、「学力」に大体こういう形容詞を付けるのが流行りですけども、結局その議論をしなくちゃいけませんので、私は、もう少し授業に根ざした学力分析をちゃんとした方がいいと思います。

たまたま、東京のある区の教育委員会とタイアップして、その区が独自にやっている、あるいは東京都全体でやっている学力調査のデータを私の研究所でいただいて、少し丁寧な学力分析をいたしました。そうしますと、かな

り授業改善に使えるような、せっかくテストをやっても、それがやはり「授業をどうしたらいいか」ということにつながらないといけない。テストの結果で、平均点を比べたりしていたのではあまり役には立たないので、「一人ひとりの子どもがあと５点、あと１０点上げるのにはどうするか」というふうに、きめ細かくデータ分析しないと私は駄目だと思っています。

そういう面では、今月発表される国のデータについても、是非、福井県全体それから教育委員会、あるいは各学校で、丁寧なデータ分析をしてもらいたいですね。間違っても「どこが何番だ」みたいな数字の比較は、これは小学生でもできる話でありまして、やっぱりプロが分析をするには、きちっとした、授業改善に役に立つ学力論を展開して、データ分析をしていただきたいと思っています。

そうは言いながら、結構このソフトは何百万もするものでありまして、教育委員会は「まったく金がない」と言うので、私の研究所の研究費で買って、データをいただいて、今、一つひとつの学校に少し具体的な授業改善に役立つことをやっております。県でしたらそのことは多分できるだろうと思いますので、指導部系統あるいは教育研究所、あるいは福井大学その他の専門家の知恵を上手く組み合わせて、いろんな分析をしていただきたいと思っています。やはり、学力調査は授業改善に役に立っていかないと、私は、上手くいかないと思っています。

それから、教員の指導力の問題ですけれども、今、教員評価の問題が各都道府県で盛んに議論をされていて、苦労しながら実行に移しているところであります。私の研究所でも、今年から４年間かけて養成段階と研修段階、それから人事行政としての教員の評価を、３セットでやることになりました。非常に難しい問題で、私は個人的には、あまり研究テーマとしてやりたくない。そんな教員の評価はあまり誰も喜ばないというか、高く評価された人はニコニコしますけど、低く評価された人は嫌な顔をするので、私はあんまりやりたくないんですけども。でも、やはり、しっかり頑張っている教師を評価するシステムは作らないと、世間から、県民から、もうそろそろ納得されないんだろうなと私は思っておりまして、是非、福井県でも教員の授業力といいますか、教師としての能力の評価をしっかりとやっていただきたい。

このことは、この度の教育改革関連３法の中で、校長、副校長あるいは主幹、それから指導教諭というような、教師の中での、ある種の職階を設定したということもありますので、例えば、指導教諭と一般の教諭とはどう違うのかということについては、これは国もやらなければいけないんですけども、県としてもきちっとやって、処遇に反映をしていくことは大事なことだろうと思います。そのことによって、先生方に目指すべき目標、つまり、どういう教師になればちゃんと評価してもらえるのかという「目指す姿」をしっかりと示す必要があるのではないだろうか。そういう面でいうと、３ページに書いてありますが、私は、プラスイメージの教員の状況をできるだけ早く確立してほしい。国も都道府県も、指導力不足教員についてはずっと議論をしてきて、それについてはいくつか対策を立てたりしているところが大体整ってきましたけども、この「優秀教員を表彰する、見つけ出す、励ます」ことは実はしっかりと行われていない。外国では、例えば、アメリカでは「ティーチャー・オブ・ザ・イヤー」みたいな形でやっていますし、イギリスでも「アドバンス・スキルド・ティーチャー」といって、ワンランク上の教師を認定して処遇を変えるということをやっています。上を引き上げることによって、教員全体の指導力を向上させるというやり方は、日本に馴染むかどうかというのはなかなか難しい問題がありますけれども、私は「良い教師とは

どういうものか」というのをはっきり出す方が、一人ひとりの教師にとってイメージができて良いのではないかと思っています。もうそろそろ、足を引っ張るような教員の文化はやめて、いい教師にしっかりとスポットライトを当てて、他の人がそれを一つのモデルにして「頑張ろう」というふうになっていく。幸い、学校とか、教師とかは、誰かを踏み潰してのし上がっていかなければいけないという競争の社会ではありませんので、いい授業をしている教師の教え方があれば、それはどんどん真似をして、いい教材があればどんどん取り入れて共存共栄といいますか、いろんな学校、いろんな教師がそういう経験や交流をしていくことが、私は大事だと思っています。

今後、いろんな形で、その成果を検証するデータがたくさん出てまいります。しかし、まだまだ日本は他の国に比べると、今申し上げましたようなテストデータの分析一つとってみても、いわゆるエビデンス・ベースドでなくて、きちっとした成果を使いながら改善を図っていくっていうようなことが非常に遅れている、データ主義の改善が遅れている国ですので、私は、しっかりとデータで取れるものは取って、それを活用していくことが必要だと思います。しかし、学校は確かに非常に分かりにくい、成果がすぐには出にくい部分もありますので、それはそれでまた、長い目で見たり、あるいはザックリと、要するに「あの先生の授業はいいよね」ということも、私はあってもいいんだと思います。しかし、何でも全部そこに行くと、良い教師、良い授業って何かということは、分析的な見方があまりにも疎かになっているので、分析的な見方と、総合的な見方と、上手く組み合わせして、良い教師、良い授業、あるいは良い学校という評価をしていった方がいいのではないかと思います。

良い学校ということに関しては、私の研究所や文部科学省の方で、いわゆる学校評価として、今、準備をしております。私の研究所でも２年前から評価をやり、今年度から私の研究所が独自に小・中学校に対して学校評価の第三者評価に伺うことになっており、今、準備をしております。残念ながら、福井県にはちょっとお願いができませんでしたけども、全国の２５の小・中学校を選んで、私の研究所が独自に各学校に自己評価をお願いして、それを基にして第三者評価をして、いい学校とは何かということを、今、研究しようと思っています。これは、先ほどの話では、次回のテーマだと聞いておりますけれども、そういうことをやることによって、教員はどういう研修をしたらいいのかということが、４ページの論点２に関わってくることだと思います。

このことに関して、私は論点３について福井県がどうするのかをむしろお伺いをしたいのですけども、やはりこの教育研究所とか教育センターの在り方が、全国的に、今、非常に問題になっていまして、もうそろそろ、専門の教員の研修のスタッフを揃えたりすることがあっていいんじゃないかと思います。場合によっては、一部民営化することがあってもいいんじゃないかと私自身は思っているんですけれども、それはやり方もいろいろ工夫しなくてはいけませんので。

と言うのは、今のままですと、福井県はちょっと細かいこと分かりませんが、教育研究所に指導主事として行ってですね、何年かしたらまた学校に戻るということになります。これだと、やはり教員の研修という大事な仕事を専門的にやる人材がなかなか育たないんですね。私は先週、高知県の教育センターに招かれて教頭研修の講師をしてきましたけども、やはり何年かするとその方はいらっしゃらなくなって、またゼロから研修の企画をしなければならないという形になってくる。やはり専門的な教員研修のプログラムづく

りがあってもいいのではないかと思っています。ただ、今日は知事さんがいらっしゃるので、是非お願いをしておきたいのですが、どこの県に行っても、この研修機能に対して予算が削られて、先生方は「やりたいんだけどもできない」ということが出てきています。私は、お金をかければいいというものでもありませんけども、是非、効果的に教員研修の条件整備をしていただきたいと思います。今では例外的になりましたけど、富山県は３か月ぐらいの単位で、私の研究所に数人単位で教員を送って寄越して、この人は３か月間東京で、例えば私のところで研修をするということをやっています。いろんな方たちと交流することが大事なことですし、福井大学が、来年、教職大学院をつくるということであれば、是非これもまた活用していただきたいと思っています。

理数の問題は、これも非常に大事な問題で、研究所でもそれをかなり一生懸命になって研究をしておりますけれども、私自身はそれほど専門でもないのですが。ただ、今、文部科学省から研究費をもらって、ある民間の企業と教育委員会とタイアップして、その企業が持っている理科教材を活用した、夏休みとか放課後の「理科大好き講座」をやってましてですね。これはやはり、普段の授業の中ではなかなかできない、あるいは先生方の中でも不得意な方がいらっしゃるので、夏休みとか放課後、あるいは土曜日を上手く使って、じっくり時間をかけて、理科あるいは数学なんかに興味を持てるような指導をするということが、やりようによってはできますので、その辺を是非工夫していただきたいと思っています。

祖田座長　　続きまして、左巻委員いかがでしょうか。

左巻委員　　私自身は、初めは公立中学校に勤めており、中でも東京大学教養学部附属中・高等学校には１８年間と最も長く勤めておりました。そこは受験校ではないがいろいろと研究をしている学校で、「総合的な学習の時間」のようなものには、何十年も前から取り組んでいる学校でした。そこで理科を中心に教えてきました。

実は私自身は、福井県のほとんど全県で使われていると思いますが、中学校理科の検定教科書の編集委員・執筆者で、かなり有力な執筆者です。それで、福井県には親近感をもっております。その教科書もかなり出来の良い教科書です。

もうひとつ、検定教科書のダメな部分を改善するために作った検定外教科書というのがあります。これは、言い換えれば学習指導要領が悪いためで、それを改善する意味で小学校、中学から高校の初級くらいまでのものを出しています。中学校で２０万部くらい、高校でも２０万部くらいの部数を出しており、少しは影響を与えられたと思っています。検定外教科書は、陰で批判ばかりしていても影響がないので、「具体的に自分たちの考えるものはこうで、こうやると子どもがもっと面白く、もっとモチベーションを高めて学習に取り組める」という具体的内容を世の中に問う、という趣旨で作ったものです。

ところが検定外教科書は、副教材としては何の問題もない訳ですが、これを公立中学校で使おうとするといろいろなところから圧力がかかって使えない。管理職に打診したりすると、やめておいた方が良いと言われて使えないそうです。では、どんな学校が使っているかというと、かなり有名な私立中学校が使っています。出版社の調べでは、各学年７０校以上で検定教科書にプラスして検定外教科書も使用して授業をしています。私はそういうことを

やっているという前提でお話します。

福井県には、地域や学校単位、あるいは県全体の規模の場合もありましたが、先生方に対する指導という形で講演や実験講座のために、年に何回か来たことがあります。その時の感触ですが、福井県の先生方は、東京や大阪、京都近辺などの先生方と比べて「スレていない」と言えます。都市周辺の先生は、教員としての本当の仕事以外のところに興味が向いてしまう。福井県には、教育にちゃんと携わろうとする気持ちを持っている先生が多い気がします。福井県や長野県は、私のような人を呼んで講座とかをやろうとする回数が多いところであり、先生方の意識がまあまあ高いと思っています。

日本の理科の教員は、アメリカなどと比べて非常にレベルが高い。バックグラウンドとして非常にレベルの高い状態で学校の教員になる。ところが日本の場合、あとでダメになっていく教員が結構多い。教科書をこなすだけで、実験が面白くなくても良いと考えてしまう。それは、無難に与えられたものを教科書どおりにこなしているだけの方が、親にも、同僚にも、教育委員会にも、誰にも文句を言われないからです。ただし、それではダメになっていく、年をとるにつれてダメになっていくのです。

それでもまだ、福井県の先生方は講習会を開いたりして勉強しようという気持ちがかなりあるので、例えば、いろいろなところに研修に行けるようにするとか、あるいは地域で、小学、中学、高校まで含めた先生方でサークルをつくり、勉強し、それを授業に反映させることをできる奨励策があると良いと思います。ダメなのは学校の中に閉じこもること。いろんなことがあるのに外を見ないで、ずっと教員生活を送って終わってしまうとダメになる可能性が比較的高くなると思います。先ほど、国立教育政策研究所に何人かの単位で研修に来る県があるというお話がありました。国立教育政策研究所以外にも研修先はいろいろありますので、外の世界を見てみるとよいと思います。

一番の問題は、全国的な傾向ですが、小・中学生にアンケートで理科が好きですかと聞くと、小学校では「好き」と答える人が結構多い訳です。それが中学校になると半分以下になる。そこで問題なのが、小学校で「好き」と答えている人の中には将来につながらない「好き」もたくさんあるとうことです。そういう人は、ただ小学校の理科が「理科っぽくないから好き」なだけで、中学校になって「理科っぽくなった途端に嫌い」になるのです。

逆に、中学校になって「好き」になる人もいる。中学校になると論理がわかる内容の学習が始まるので、中学校になって理科の本当の面白さが分かるようになり、理科が好きになる人もいる。そういう人をどうやって増やすかが重要です。小学校では「好き」と言っている次元が低い可能性があります。中学校になって理科や数学の本当の論理が分かって、「人類の文化としてすごいんだな」と思うこと、知的な面白さで理科を好きになるようなサポートを県としてできることがないか考えることが大事です。

国際的な理数の調査をすると日本は常にトップグループにあるが、意欲やモチベーションといった情動的なレベルは先進国の中でもすごく低い。他にも台湾や韓国といった低い国があるため、（東京大学教育学部教授の）佐藤学さんは「東アジア型」とも言っています。選択肢の問題をやったりすると正答率が高く世界のトップレベルにあるが、「将来、理科や数学に関する仕事はしたくない」とか「家に帰って理科や数学の勉強はしたくない」とか、情動的なレベルは低い。そこに危機感を感じます。それは、結局、自ら主体的に学ぶということが全然できていないからで、小・中・高と進むにつれてそれがひどくなり、今のように大学での対応がいろいろと大変になるのです。

子どもが情動的な部分で意欲を示すようになるには、教師もそうでなければならない。教師が、自分の教師生活に充実感、やりがいを感じられるというのはどういうことでしょうか。ちょっとでもやりがいが薄れると気持ちが部活とか他のことに向いてしまうのです。部活は、日本では非常に重要ですが、逃げ道になってしまっている。授業や生活指導など学校でやっている一番根幹の部分の手を抜いて、部活だけに力を入れるようになってしまう。

教師が授業に対してモチベーションとかやりがいをもてるようになることが、子どもにやりがいを持たせることにつながるのではないかと感じます。教師の評価の仕方も、イギリス型のように厳しくなるかもしれない。ある程度ダメな部分はダメと言わないとしょうがないが、マイナス評価は絶対してはいけない。日本の教師のレベルは高いが、何年かしているうちにダメにしている部分という点に注意しなくてはいけない。

祖田座長　　続きまして、長谷委員いかがでしょうか。

長谷委員　　私は、現代美術を作りながら、小・中・高と福井県で教員をしており、年をとるにつれてダメになった一人かなと思っております。辞めまして３年経ちますけれども、ちょうど学校教育の補完という意味で「若狭ものづくり美学舎」というのを立ち上げ、そこで学力向上塾とか、生活文化塾で不登校の子を預かったり、やる気をなくした子にやる気を取り戻させたりすることに取り組んでいます。内心、「若狭ものづくり美学舎」を通じて、若狭町でのバウハウス（Bauhaus：かつて美術と建築に関する総合的な教育を行ったドイツの学校）になりたいと思っています。

そういうことを思いながらやっていますと、地域とか、地域の雰囲気というものが非常に重要であると感じてまいります。そんな訳で、若狭町の文化振興アドバイザーもやっております。

また、子どもと接していると家庭の問題も痛切に感じております。学力向上塾で不登校の子を７人見ております。中には、９年間一度も学校に行けなかった子もいますが、そういった子がやる気を出すのを見ていますと、学ぶ意欲をどう出させるかが根幹の問題だと思います。意欲をどう起こさせられるか、どうつけられるかが一番論じられなければならないことだと思います。

今も、教師の態度といろんな意欲との関連をおっしゃられましたけれども、「総合的な学力」の検討の柱のところで、自ら学ぶ意欲にひとつの視点を置きながら、「確かな学力」、基礎学力、思考力、判断力、表現力を考える必要があります。主体的に学ぶ意欲をきちっと押さえることが、学習の意欲とか学習の仕方の意欲とかにつながっていくと思います。そういう能力を論じないといけないと感じます。

読み・書き、すなわち言語能力と言っていいと思いますが、これは学ぶ意欲と関連すると思います。すなわち、自分の考えをもつことが、読み・書きの前提になると思います。読み・書きは、理解学習と表現学習に分かれると思いますが、ものを読んで理解したり書いたりするには問題意識を持つことが一番大事で、自分自身が問題意識を持っていなければ文章を主体的に読めないと思います。つまり何か問題意識を持たせないといけない。今の教育においても、意欲とか問題意識とか、学習の前段みたいなところをもう少し論じていかないといけない。小手先の技術論だけに走ってはいけないと思います。表現学習においても、話したいこと、書きたいことを持っていないと話せないし書けない。読み・書きの問題意識と関わらせることが、何を読ませ、何を書かせていくかにつながっていくと思います。

教員のことですが、父親も母親も大卒が多くて、教養豊なお父さん、お母さんになってきている。過去のように「教員は賢い、立派」という考えはなく、並列になってきている。そういう現状を考えると、教員には修士とか博士などもう１ランク上を求めていかなければ、いくら中身だけ良いからといって「教員を敬え」とか「尊敬しろ」とか言ってもそれは無理だと思う。フィンランド、ドイツ、フランス、アメリカなどを見ても、教員はほとんど修士を持っているので、そういう方向性も少し考えていく必要があるのではないでしょうか。

福井県の場合には、割とみんな勉強熱心なので、手立てさえ組めば、良い方向に向かうと思います。教員がみんなから敬われる方向、雰囲気を作っていかないとダメだという気がします。

私は専門ではありませんが、理科教育においては、環境教育から始まる理科教育は割と子どもたちの興味関心を高めているように思います。若狭町が環境立地を宣言して、一昨年から環境教育として体系的に子どもたちに取り組ませているのを見ると、子どもは理科好きになってきており、それは数値的にも表れてきています。例えば、土とは何か、土と生活、土と農業、土と災害、土と環境などと、どんどん発展していくと、エネルギー問題につながっていき、理科全体を身近な問題として関心を高めていくことができると思います。

祖田座長　では、他の委員の皆様からも、ご意見を伺ってまいりたいと思います。どなたからでも結構ですので、発言をお願いします。

吉岡委員　質問というふうに書かせていただきましたが、国際的な学力調査ＰＩＳＡの結果によると、フィンランドが読解力や科学的リテラシーなどの項目で上位であるという結果が出ているが、フィンランドが上位である理由について、インターネットなどで調べていても今ひとつよく分からない。

日本の詰め込み型の教育と、欧米型のどちらかというと「総合的な学習」中心の教育との違いを比べ、どうやったら子どもたちが自分たちの興味の持っていることに伸び伸びと取り組む意欲を感じられるかを考えました。

福井県は小さい県なので、人口の少ないフィンランドや海外の実際の教育の方法が参考になるのではないかと思い質問させていただいた。ご存知の方がいられたら教えていただけないでしょうか。

長谷委員　国が違うので、単純に比較することもどうかと思うが、へき地教育の関連でフィンランドの教育に関心を持った。フィンランドではわざわざ複式学級をやっているので、そこから学ぶことはないか勉強しました。先生が黒板に字を書くということが少なくて、生徒同士が教えてなぜ学力が世界一になるのか、興味がある。

それと、少し競争原理が働かないと人間は伸びないと思うのですが、ほとんど競争原理のないフィンランドで学んだ子どもの学力が、どうして世界一になるか興味がある。けれども、生活の仕方から考え方すべてが違う国のやり方を、単に日本と比べてもいけないと思う。

小松委員　昨年１０月に文科省の調査でフィンランドに行ったが、結論から言うと、フィンランド教育というのはすごく誤解されていると思う。しかもとても美化されて誤解されていると思います。

フィンランド語が分からないので、（フィンランドメソッド普及会会長の）北川達夫さんというフィンランド語の分かる人を口説いて一緒に行きました。いろいろな人がフィンランドのことを語っているが、彼の言っていることが最も信頼できると思っています。

例えば、教師はみんな修士号を持っているというが、フィンランドでは当たり前だというのです。日本のように大学を卒業して大学院で修士をとるというのではなくて、フィンランドでは大学を出るとみんな修士になるようになっているそうです。ヘルシンキ大学にずっと籍があり、そこで修士号をとるのだそうです。修士号という言葉に誤解をしているというのです。

フィンランド語は２０世紀になってからの新しい言語で、文法的にもまだ整備されていない部分がある。そのため、フィンランドはフィンランド語を教えることに一生懸命なのです。したがって、教材も必ずしも十分できていないのです。ほとんど国中がへき地みたいな国で、国民はスウェーデン語やかつて植民地であったロシア語を話す。フィンランドはヨーロッパでは敗戦国なんです。西側と東側の境にあった国で、閉鎖的で、海岸から１０キロとか２０キロ入った内陸地には外国人は住まわせなかったのです。スパイが入らないようにものすごく閉鎖的な組織を持っていた。参考にするにはかなり違いがあるような気がします。

また、教師はかなり自由にしていると言われるが、実は教育実習の学生をものすごくコントロールして教育している。教材の選び方や教え方について、手取り足取り指導して現場に出している。教科書の後ろに、ものすごいボリュームの教え方の教材があるそうで、教師はそれを頭に入れてやっている。それで、表面上は、放っておいてもみんな自由に授業をやっているかのように見えるのです。さも、教え方がとっても自由で、日本では文部科学省や教育委員会が管理していると言わんばかりにですね。

フィンランド語を英訳した学習指導要領があるが、これには誤訳がある。フィンランド語では「社会性、公共性を教えることを学校教育の目的とする」と書いてあるのだが、その部分が見事に抜け落ちている。フィンランドの教育は、個人の能力・個性を伸ばすものだという部分しか書いていない。フィンランド文部省で並べて比べて聞いてみたら、そうだということでした。我々には英語版のパワーポイントしか見せてもらえないのですが、間違えているのです。

フィンランドに限らず、日本人の外国研究者は片思いをしているように思います。私はイギリスを調べに行く人間ですが、日本を批判するためにイギリスを見に行く方がたくさんいらっしゃる。もう少し現実を見てこないと誤解を受けるなと思います。

私もフィンランド語がわからないので、これ以上何ともいえませんが、北川さんに言わせると、フィンランド文部省と、ヘルシンキ教育委員会は、日本人にうんざりしているそうです。同じ質問をして、同じ回答をすると満足して帰っていくと。「日本人、お断り」とも言われているそうです。「もう少し違う質問をしないのか」と、彼には陰で言うんだそうです。でもこれは逆バージョンもある訳です。日本へ外国の人が来て、日本の教育をとっても美化した質問をしてきて、「そうだ」と答えると喜んで帰っていくこともある訳です。そんな時に、「あなた方、学ばない方が良いこともあるんだ」ということをバランスよく言わないといけないし、我々もバランスよく聞かないといけない。外国研究というのはすごく難しい。

彼自身、京都の小学校とタイアップしてカリキュラム開発をやっていますので、彼自身がフィンランド語の研究を大学院でやっていて、その点いいか

なと思うんですが、１億人を超す国民が、人口４～５百万人の国と比べてもしょうがないと思う。私は、日本の教育は非常にレベルが高いと思っています。だから、参考例にはなるかもしれないが、モデルにはせず、それを日本でどうするか、福井県でどうするかというのを議論したらよいのではないかと思います。

祖田座長　　他にございませんでしょうか。

佐野委員　　要するに、指導力を育てるにはどうするかということについては非常に難しいし、なかなか具体的な答えが出せるようなものでもないかと思う。

まず、この問題に対する私個人としての考え方のアプローチとしては、小学校から中学校、高校へ上がっていく中で、自分は本当に授業が楽しかったかどうか。実際、今と比べてみると時代が違いますから、一概に言えないと思いますが、結構、小・中・高校と授業は先生によっては楽しかったなと思った部分はあったと思うんです。国語が、中学校のときにものすごく面白くて、言葉と実態との関係について教えてもらえた感じがして、表現というものの魅力について学んだと思うし、授業が面白かったと。あと友達と遊んだとか、まあいろいろな部活も、熱心ではなかったけれども、やったと。

確かに、面白い授業や楽しい授業と、嫌な授業があったのは、間違いないです。これは、やはり先生の魅力が大きかったんじゃないかなと。中学校のときに、担任の先生は数学の先生で、非常にうまく教えてくれたので、高校受験の時には楽だったというか、勉強になった。そういうのはものすごく良かったなと思うのだけれど、ただ先生は嫌でどうしようもなかったとか、先生は嫌だったが、授業は非常に面白かったとか良かったとか。いろんな要素が一杯あるので、指導力というのは先生によってそれぞれ違うし、生徒も違うし、いろいろなことがあるんだけれども。中で１番印象に残ったのは、先生の熱意というものが伝わってくる先生がいました。正直な先生というか、質問に行っても「わからないが、多分こうしたほうがいいのではないか」という感じで、一生懸命に教えてくれる先生もいたと。子どものことをよく気にかけてくれて、「顔色悪いけどどうしたんや」と昼飯時にご飯を食べながら話をした。そういう先生については印象が強いと思います。そういう先生は、面白かったとか、良かったなと今でも思います。

一番印象に残っているのが、小学校３年生の時の先生ですね。「下肥（しもごえ）」ですか、当時戦後ですから、肥料の下肥ね。あれ、畑の中に埋めてあるんですよ。そうすると、僕らそれにうっすら雪をかけてわからないようにして人をはめて遊ぶとかやっていたのですが、小学校３年生の担任の先生は、あの下肥について話をしたんですよ。お百姓さんは、下肥を畑に撒くときは自分でなめていい肥料かどうか確かめてから撒くんだと。そういう話をしたのをものすごくよく覚えているんですよね。そのことはどういうことなのか良くわからなくて、小学生のときは、なんて汚いことをするんだということしか思い浮かばなかったんですが、その先生は今思うと、ものすごく子どものためを思って、一つ一つの仕事を本当に丁寧にするということがどういうことか、ということを言いたかったのだろうと思うんですよね。生徒のことを考えてくれていた先生だったと。当時、軍隊上がりの先生もいて、生徒をスリッパでひっぱたく先生もいましたが、その先生はそうしたことは絶対しない。まあ、そういったことで強烈に印象に残っており、今考えると仕事の在り方というものをお百姓さんの例えで、物事を一生懸命やることの姿勢がその先生にあって、いろいろな勉強を教えてもらったと一番印象に残ってい

ます。

そういう意味で指導力というのは抽象的、一般的に言えば、それぞれの意見が出てくるでしょう。また、教え方といったそういう専門分野での方法論、教え方の評価とかそういったものは研究が進んでいて、それはそれであるのだと思います。学科でも、こういう教え方をした方がいいのだとか。それは、専門家のいるところでしっかり追求して行くことだと思います。

それから、受ける側の子どもの問題もあると思うんですよね。教える、学ぶというのは、生徒と先生の共同作業で、家庭で集中力をつける必要がある。読書などというのは習慣だと思います。だから、そういう集中力をつけていく「習慣の力」というのは家庭から責任を持ってつけていく必要があるだろうと考えます。そういう「習慣の力」がベースにあれば、何かを学んでいくということにつながっていくのではないか。マスコミの視聴率調査があって、新聞は家庭で何分読まれているかというと１２～１３分程度ですね。一方テレビはどうかというと、２時間くらい見ている訳です。その家庭の時間の使い方、そのことの良し悪しは別として、テレビは２時間で、新聞は１２～１３分。寂しいなあと思うけれども、新聞はパッと見ればそのくらいの時間で大体理解できる。それでも全体がパッとつかめる優れた面があるのではないかと。一覧性があって、それから、後から必要に応じて見直すことができる。

家庭で子どもたちが、だらりとテレビを見ている時間が多すぎるのではないかと私なんかは思うので、家庭で物事のメリハリを持って生活する態度を子どものころから付けていくことが、学校で授業を受けていく、学ぶ力のベースの力につながっていくのではないかと思います。だから、授業という側面と、家庭でどうするか、地域の側面、そういった連携をどう作っていくかということも大事なのではないかと思います。

祖田座長　この会議では、当初から「総合的な学力」ということが提起されていまして、ご議論いただいているところですが、ただいまのご発言は、教える側の総合的な授業力といいますか人間力といいますか、それを合わせて総合的な教育力ということについてお話いただいて、非常に重要なお話ではなかったかと思いますが、他にございませんでしょうか。

長谷委員　今、教員の資質向上ということを言われましたが、私もいくつかの学校現場を歩いてきたんですが、同じ教員でも、学校によって、その人間関係によって、力を発揮できる場合とできない場合があります。人間なんてそう大差ないように思っているんです。結局そのチームの組み方によって優れた力を出してくるし、そこがまずいとダメになる。やはり、学校の中で、教師集団という集団の力を高め合うチームをいかにして作り上げるか、そういうところが資質向上に非常に大きいのではないか。研修というのは自己研修が原則ですけれども、その１番近い教員集団が高め合えるという学校をどう作るということが、資質向上という面では、自己研修に次いで大事になると思います。

それから、教員の評価とか、顕彰とか、昇進とかいう問題になってくると、いい選手がいい監督になるとは限りません。やはりずっと教えている方がいいという教師もいる訳でして、一方で校長や教頭に向いている者もいて、そういうところを早めに仕分けする。そんなことを言うと失礼に当たりますが、教員として優れているから教頭にするという今のようなシステムではなくて、何かその辺も考えていかなくてはならないと思います。だから、待遇面について、専門職、専門教員ということで、理科なら理科についての専門教

員として教頭などに匹敵するような待遇をする。その教員を見て、向いているところに向けていくことが、教員の評価という点では大事ではないか。多様な評価ということをしていかなければならないと思います。

祖田座長　　他にございませんでしょうか。

黒木委員　　先ほど、フィンランドのことをおっしゃっていましたが、ＰＩＳＡの場合は学校で学んだことにいかに習熟しているかを見る試験ではなくて、それを生活の中でどう応用していくか、自分で考えていくかを見る試験でございまして、ある意味では日本ではそういう点は一番遅れている。フィンランドは、逆に言うと、そういった面については、幾分そのことが学校教育の中でも日常生活の中でも取り入れられているということがあるのではないか。

先生の力量も多分、先ほど修士のお話も出ましたが、フィンランドの場合は、無償だから大学にも何年いてもいいという状況があって、やりたいことをずっとやっているのではないか。大体どこでも６年という話があり、先ほど修士の話も出ましたが、しっかりと力をつけるには６年くらい必要なのかなということです。

そこで、ちょっと別のことになりますけれども、いわゆる「教師感謝デー」を設けたらどうかということを書いてしまったのですが、現在の教師の状況は、叩かれるだけ叩かれる、あまり褒められることがないという状況があって、それは働くという意欲をかなりそいでいるという状況があります。私は去年、上海市内の大学と交流しているということから、中国に行ってきたのですが、講演が終わったときに、学生が花束を持ってきたんですね。で、その学生が言うには、今日は「教師感謝デー」ですと。そういうことで花束をもらいました。そういうシステムが向こうにはあるのかということで話を聞いたら、大学だったのですが、大学の先生も表彰される先生は集められて表彰されるということです。そういう教師に対する「感謝デー」というのを、教育委員会でいうと変な感じになるから、ＰＴＡ辺りで考えて学校で設けたらどうかと思います。つまり、１年に１回くらいは、先生方が感謝される日があってもいいのではないかという気が私はしておりまして、そういうことをちょっと書いたんですね。日本の場合は、人を褒めるというか、感謝するというと何か変な感じになるということがあるようですが、本当は教師という仕事は大変な仕事だということを分かっていただく。教育委員会というよりは、各学校でそういう試みがあってもいいのではないかと思います。

それから、家庭の中でなかなか学習する習慣がないと。私、先日の高校野球の中で非常に感銘を受けたのは、（優勝した佐賀北高校の野球部）監督の百崎先生が、「高校生、みんな勉強していますね」と記者が聞いたら、「高校生だから勉強するのは当たり前でしょ」と応えたというんですね。こういうことが言えるというのがすごく大きいと思います。その当たり前さということをどう作っていくかということがある。昔で言う、「予習して、授業聞いて、復習して」という習慣がほとんどなくなっているということです。大学に入ってきた学生に聞くと、最近の高等学校では「予習しなくていい」と言われていると言うんですね。とにかく授業を聞いて、帰ってから問題集を繰り返せばよいと。受験対応だと、こういう考え方になってくるんだと思うんですね。だから、学習のやり方というものをきちんと習慣付ける、というところも少し取り入れていったらどうかと思います。

それから、教員の研修に関して言えば、今、学校が非常に難しくなってきているのは、子どもたちも変わってきていることもありますので、ある部分

だけ切り取って研修をするというのは余り意味がないのかなと思います。いろんな分野の専門家が一緒になって、専門の方や教員ＯＢの方などがチームを組んで研修に当たるのがいいのかなと思います。専門家が結びついて困難な問題解決に当たるノットワーキング（knot-working：結び糸細工。つながりが変化しつづけるダイナミックな関係性）ということが、今問われている訳ですから、そういう研修の在り方についても、教科ということも重要ですけれども、それだけではなくて総合的な研修を作っていくというのが重要だと思います。

祖田座長　先ほど、その在り方はいろいろ国によって違うようですが、他の国では修士号を持っている先生が非常に多いという話がありました。黒木先生のところでも教職大学院をつくられますが、どうでしょうか。

黒木委員　我々としては、現職の先生方と、それから、ここでも先ほどから問題になっておりますが、臨時任用の先生もターゲットにしております。大学教員の側も、教育学の先生もいれば、教科専門の先生もいるし、現場からの先生もいらっしゃるので、まさにノットワーキングでそういった方に入っていただいて、大学側が学校現場に出かけていって、そこのタイムスケジュールに合わせてやっていくということを考えております。

祖田座長　分かりました。他にいかがでしょうか。

岩下委員　他の先生方がおっしゃった意見に重なるところが多いので、そこは省いて申し上げます。

私は、先生方がどういう取組みをしているか、生徒たちからどれだけ人気があるかということではなくて、先生方自身がどれだけ自己投資をしたか、私はこれとこれを受けに来ましたということではなくて、体験値が高いということが伝わる体験をどれだけするのか、ということを意識させることがひとつ必要だと思っています。それを「他流試合」のところで書かせていただいているのですが、やはり、いいものを見に行くであるとか、共同でコミュニティを作って自分たちで活動をするであるとか、子どもたちが先生方のそういう背中を見て、リスペクト（尊敬）するシーンを作るという形にもっていければ、指導力全体の底上げになると思っております。

ただ、気をつけないと、ＰＴＡというか、親御さんたちは、「あの先生がいい、担任を替えてくれ」と固有名詞で語りかねないので、「あの先生が、この先生が」ということよりは、黒木先生がおっしゃるような教師に対する「感謝デー」という形がいいと思います。より、子どもたちの間でも言える、親御さんの間でも話ができる「うちの学校の先生たちはこういったことをやっているわよね」と言っていけるような回路を作るということが、全体としては必要なのかなと思います。

「総合的な学力」を伸ばすための教育施策というところで、今の教科学力という点で考えてみれば、福井県が決して低い訳ではなくて、高い水準にある訳で、それをどう補完していくかということで言えば、「もう何点上げてほしい」と言うことではないはずで、状態をイメージした方がいいかなと思っております。少なくとも、学校の先生たちの間で「福井県のやっていることはすごいよね」と言わしめる取組みを、状態目標として行っていければよいのかなと思います。それが問われるのがリーダーシップと考えまして、管理職のリーダーシップを、私は意見の中に入れさせていただきました。

フィンランドについては、私も北川先生と一緒にお話をする機会がありまして、そこで伺った話ですが、要は、ＰＩＳＡは「教科書のこの範囲を習いました。さあ点数を計ります」というところで出る点数ではない。「習ったことをどう使いますか」という中で、フィンランドではそういう授業をやっていて、日常もそういうトレーニングになっているので、そういう能力が高いということなのだということです。「教科書を終わらせる」とか「履修が全部できた」とかいうことに汲々とするのではないところに少しでも突き抜けられれば、日本は平均的な基礎学力が高い訳ですから、フィンランドの成績云々という点については気にしなくて良い、というのが私の感想です。

吹矢委員　教員の指導力というと、教科指導にどうしても偏りがちです。もちろん教科指導は大事ですれども、今のフィンランド型の、日本でいう「総合的な学習」みたいなことを考えますと、授業は授業ですけれども、その授業の結果を応用して、課外活動とか、学校での行事とか、どうしたら学校祭を成功させることができるか、どう計画していったらいいのか、どう皆をまとめていったらいいのか、リードしていったらいいのか、そういったことにどれだけ積極的に関わっていけるか、教科指導だけではなく、他の面の習ったことをうまく利用しながら行事をうまくこなしていくということが、現実には社会での本当の生きる力につながっていく。

ですから、先生方の教科指導力だけではなく、そういった部活を指導する力、子どもたちの仲間づくりを支援する力、行事に関する指導力など、いろいろな広い視野で先生方を評価できる体制ができると、いろんなところで先生一人ひとりの特徴がうまく生かされるのではないかと、皆さんの話をお聞きしながら思いました。

適材適所という言葉も出てきましたが、そういった評価も大事ではないか。それから、自己研修の意欲ももちろん重要なのですが、教師間の仲間づくりの意欲というのも重要で、それが子どもたちにも伝わっていくと思います。

祖田座長　分かりました。他にいかがでしょうか。

吉岡委員　フィンランドの件はよく分かりました。私の資料にも書かせていただきましたが、中教審は「総合的な学習の時間」を削るという方針ということで、ちょっと残念だったなと率直に思いました。

やはり、皆さんの意見でもいろいろありましたが、生きる力というか、社会に出て何が一番大事か。もちろん基礎的な学力、読み・書き・そろばんも当然大事だと思います。しかし、企業に入り、実社会に出る場合には、「総合的な学習」で学んだプロジェクト的な発想を子どもたちが身に付けているということが非常に大事だと思います。

小学校の取組みでも、例えば、１年生の子どもたちが幼稚園の子どもに昔遊びを教えるという「総合的な学習」を見せていただいたんですが、驚きというか、「こういった子どもたちが将来、大人になればすごいな」と感じました。そういった「総合的な学習」というものを、特に小学校とか、低学年のときにしっかりと身に付けていただくことによって、高校になってきたら逆にそういったことを自分たちの学習に自然に取り込んでいけるのではないかと思います。できれば、小学校、中学校といった低学年のうちにそういう学習、勉強の仕方をやるといいのではないかと思います。

そしてまた、教員の方も「総合的な学習」を子どもたちに上手に伝えていくということが教師力の向上につながるのではないかなと思っており、今回

の中教審の方針については、残念に思っています。
　それと、教員の評価という問題になってくると、企業だとか、民間ベースでいくと、社員というのは、皆さん評価されており、給料もマチマチです。やはり、教員も非常にすばらしい先生がたくさんおられるのですが、そういった中で、「自分がどのポジションにいるか」ということを明確にする指標が必要なのかなと。当然、進学校にいる教師、それからスポーツを特徴においている学校にいる教師、いろいろ評価の判断があるかと思いますが、それぞれの中で評価というものを明確にして、学校の先生が、「今自分がどういったポジションにあるか」ということを自分なりに判断できて、「じゃあ次はどこを目指そうか」というような仕組み、そういったことが全体的な教育の向上につながっていくのではないかと思いました。

佐野委員　　この議論の方向で、読み・書き重視が学力向上につながるという論理が大筋の流れですが、その前提条件には、やはり聞く・話すという部分が大事なではないかなと思います。学校教育でも、家庭でも、地域社会でも、聞く・話すというのが原点です。これはコミュニケーションであり、コミュニケーションはやはり創造性を生み出していくのではないか。自分ひとりの頭で考えるよりも２人、３人といろんな形でコミュニケーションする中で、いろんな発想が生まれてくるということですから、それは生きる力というのが「総合的な学力」につながっていき、社会性を身につけていくという意味で大事なことであると思います。
　今度の中教審の方針の中で、そういう教育の部分が学校教育としては削られてきて、読み・書き重視、学力向上、これは非常に大事な部分もあるんでしょうけれども、そこら辺のバランスの問題がやはり重要ではないかなと思います。
　コンピュータが発達したけれども、コンピュータが人間の頭を超えてはるかに優れているのは、記録と計算です。人間に残された能力というのは何かというと、創造性というか、物を考える、創り出すということです。その前提はコミュニケーションにあるし、コミュニケーションができるレベルでの聞く・話す能力、そういったものがベースとして人間的な力としてあって、それを育てていくのも学校教育の基本的で大事な部分であるし、それに学力向上の読み・書き・そろばんじゃないけれども、そういう部分で構成していくというのが大事かなと思います。そういう意味では、福井は福井の方向性として、やはり、教育の見直し・再生の全国的な流れも見ながらも、オリジナルの考え方を出していくべきだと思います。

祖田座長　　ありがとうございました。他にございますか。

左巻委員　　この会議は、どうも「総合的な学習の時間」にすごくプラス評価のように聞こえるんですが。僕自身は先ほども言いましたけど、東京大学の付属という「総合的な学習の時間」のようなものをもっとちゃんとカリキュラム化してやってきた学校にずっといて、研究主任とかいろいろやっていたんですけれども、簡単に結果だけ、また周りのいろんな学校を見ての話をしますと、「総合的な学習の時間」は、それを構想して、具体化して、リーダーシップを取れてという教員が１人か２人、それもかなりの能力を持った教員がいるところはうまくいく。だけど、大体は失敗している。
　元々、「総合的な学習の時間」みたいなものを作ろうとしたのは、今のいろんな理科や数学や国語や社会などの教科学習の指導方法をもう少し工夫した

ものにしようと。その工夫したものにするのに、「総合的な学習の時間」をテコにして、子どもたちに「学び」というものの意味を捉えさせるものができるならば、それを教科学習にどんどん入れていくためなんですよ。

だけど、テコとして上手くいかなかったんで、「総合的な学習の時間」も一部の研究指定校みたいなところだけは、先生方が夜遅くまで一生懸命やってなんとかなったけれど、何をやってもいいものなので、大方の学校では結局、「お祭りワッショイ」で終わっていく、体験学習的なもので終わったりする訳ですよ。

中教審にいる（現在の中教審副会長で兵庫教育大学長の）梶田叡一さんだとか、（玉川大学学術研究所特任教授の）山極隆さんだとかが、今の「総合的な学習の時間」はダメだと言い出しましたね。結局「学ぶ」ということは、子どもたちを育てるということで、それは国の宝を作っていくことなんで、今やっているような「総合的な学習の時間」は国を滅ぼすと言い出した訳です。「総合的な学習の時間」は、スタートの時点では、それをやっちゃいけないと言われていた教科学習との連携の方にかなり進むんです。教科学習と連携してはじめて、「総合的な学習の時間」がまたうまくいくようになってくるんです。そういうことは捉えておいた方がいいと思うんですね。

そういう点で、教科学習が、もう少し良質な知識と活用の技を教えるようにならなくてはいけないんですよ。だけど、その知識は教えるんだけど、その知識の活用の技を教えていないんですよ。その技を教えることによってもっといろんなところとつながるんですよ。そうすると、その教科学習が、実は元々「総合的な学習の時間」が目指していたようなものになっていくはずなんですよ。

そのために、小学校だったらいろんなことを教えますけど、先ほど岩下さんが言ったような、自己投資を何のためにするかというと、自分が理科の教師であれば理科を教えるだとか、その狭い、自分が教えている部分だけじゃなくて、そこにいろんなつながりがあって、自分が教えていること自身が総合的なんだよと。理科であろうと数学であろうと、そういうことをもっと自分が身にしみて分からなくちゃいけないから、そのためにも自己投資しなくちゃいけないんですよ。そのためにも、いろんな形で、他の教科で何をやっているかも知らなくちゃいけないんですよ。

僕が出した書面の中で、これは今よく言われていることですが、「同僚性の確立」というのを書いておきました。これはどういうことかというと、普通は、各学校で研修会をやるのは、本当に、１年に１回か、２年に１回くらい。それも、教育委員会から指導主事が来るからとか、何か、公開しなくちゃいけないからとか、そういう外的な要請の中でやっているのが多いのです。そうじゃなくて、本当に自分たちの学校が、教育力を上げるためにやるのであれば、理科の先生が集まって理科の話をしているだけではダメなんです。さっき僕が言った「総合的な学習の時間」をテコにして教科学習に、教科学習をより総合的に、さらに良質な知識と活用の技を教えるという形にもっていくとしたら、少なくとも学年単位くらいで、授業の研究会をしなくちゃいけないんですよ。

ただし、普通の授業の研究会は、さっきも言いましたけれど、１年に１回とか２年に１回やって、それが儀礼的に過ぎてしまえば、終わってしまうようなものになっているんですけれども、そうではなくて、日常化しなくてはいけないんですね。日常化するために何が必要になってくるかというと、空いている時間にみんなが研修に行ける訳じゃないから、校内の学年でやる研修会のために、授業のビデオとかを撮らなくちゃいけないんです。その学年

でやる研修会は、いろんな教科の先生方が見て、いろんな教科が集まって、その学年で、自分たちの学年の子どもたちが学んでいるかを見る、それを探るためのものなんです。そうすると、ビデオの撮り方が違ってくるんです。今までの研修会でビデオを撮ると、先生を撮るんですよ。先生がどんな発問をしたとか、説明をしたとか、板書をしたとか、子どもに対してどんな働きかけをしたとかを撮るんですよ。そうじゃなくて、各教科が集まって学年で話し合いをするとしたら、それは子どもがどう学んでいるかを見るんです。そうすると、ビデオを撮るときに焦点の当て方が違うんですよ。そういうものを見て、「教師がもう少しこういうふうであれば」とか、また「こういう働きかけをした方がもっと子どもが学ぶよ」とか、教科での意見交換をしなくてはいけないんです。それを日常化するというのが、すごく重要です。

先ほどコミュニケーションの話がありましたが、子どもたちも同じなんですよ。子どもたちも、自分の頭だけじゃなくて、いろんな頭を突き合わせて課題を解決していくという形の授業にもっていかなくてはいけないんですよ。そうすると、子どもたちも「共同的な学び」をするし、先生方も「共同的な学び」をして、それが統一されていくのが一番いいというのが、僕の考えです。

祖田座長　　ありがとうございました。他にございますか。

広部委員　　皆さんご承知のように、今年に入りましてから、国の方で、教育再生会議だとか、教育改革関連法案の成立であるとか、一気にいろんな教育に関する仕組み、制度が変わろうとしている訳でございます。先ほど吉岡委員も言われましたように、「総合的な学習の時間」の取扱いについても、先般来から新聞等で掲載されているとおりかなと思います。

そんな中で、福井県としての独自の教育はどうあるべきかということで、いろいろ議論をいただいている訳ですが、私自身も先般、東京の教育事情はどうなっているのかという思いで、荒川区を視察しまして、向こうの教育長さんであるとか、いろんな方に意見をお聞きしました。

一言で申しますと、東京の、特に荒川区では、わずか３キロ四方か２キロ四方の狭いエリアの中に、中学校が１０いくつ、小学校が２０いくつひしめいている。そんな中で学校の選択制が実施されておりまして、子どもはどこでも好きな学校に行けるという状況です。根本的に学校の数からして、私ども福井県と状況が違う訳ですね。ですから、大変な学校間の競争が行われている。それから、先生の間のいろんな競争もあるのかもしれません。

そういったことで、それがそのまま福井に当てはまるかどうか、それは別の話として、先ほど小松委員にお聞きしたところでは、東京の都立高校が最近いろんな手法で復権をしていると。

これからもいろんな貴重なお話をいただきたいと思う訳ですが、何せ今日は時間がございません。事務局の方では、今日は取りまとめの方向性というタイトルをつけましたが、まだまだ私どももお聞きしたいこと、教えていただきたいことも多々ございますので、また今後、ここに私を始めスタッフがお伺いをさせていただいて、いろんなご意見なりをお聞きさせていただこうと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

祖田座長　　ありがとうございました。論点が非常に多くて、まだまだ議論していただきたいことがたくさんございます。今、国で問題になっております英語教育の問題とかを話題にしたかったんですけれども、時間が参りましたので、あ

とは食事をしながら、いろいろ意見をいただきたいと思います。
　それでは、委員の皆さんからは以上にしたいと思いますが、知事さん、何かございますか。

西川知事　　先生方がおっしゃったことを全部やりたいような気分ですが、全部やれるかなということですね。いずれにしても、私の立場としては、先生ができる工夫、それから学校でできる工夫、また県全体のシステムはどうか。システムとなると、文科省から出てきているものとどう折り合うか、ということを整理してやらんといかんかなと思います。
　かつ、究極は、福井県の子どもたちの能力なり、才能なり、そういう良さですね、それが１００あるとすると、１００パーセントとはいかなくても、どこまで実現されているのか。７０とか６０では困る訳で、それは福井の何かが悪いからです。福井に生まれて、よそで勉強した方がよかったんじゃないかという話にならないようにしたいということであります。
　特に、今、教育長が言ったように、福井の独自性をうまく入れていかないと。レベルとか、地域性ですね。その中で、先生方がおっしゃるものをできるだけ入れて実行したいなと、そういう気持ちを抱きました。

祖田座長　　ありがとうございました。それでは、いろいろ委員の方からご意見を頂戴しておりますけれども、さらに現場の先生方の声も聞く必要があるのではないかとか、それから各市町の教育委員会のご意見も聞く必要があるのではないかという話も出ておりますが、この点についてはいかがでしょうか。

広部委員　　先ほど申し上げましたが、私どもは、今回の創造会議での貴重なご意見を実行に移して、福井県独自の特色のある教育を今回実現したいということで、このような議論をお願いしている訳ですが、その一方で、学校の現場の先生方の組織もございます。また、例えば理科・数学であれば理科・数学というように、教科の研究をなさっているたくさんの先生方もいらっしゃいますので、今、座長がおっしゃいましたように、そういった現場の意見も組み入れ、さらに皆様方からいただいた貴重なご提言等につきましても、なるべくスムーズに学校現場に浸透させていくにはどうしたらいいかということもございますので、十分現場の声も踏まえながら進めていきたいと思っております。

祖田座長　　ありがとうございました。では、そろそろ時間も参りましたので、終わりたいと思いますが、お気づきの点がございましたら、どんな形でも、電話でも結構ですので、事務局の方に、こんなことも考えられるということをおっしゃっていただければと思います。
　それでは、私の役目をこれで終わらせていただきます。

○閉会

教育政策課長　　どうも、貴重なご意見をありがとうございました。１回目、２回目といろいろご提言や忌憚のないご意見いただいておりますので、こういったご意見等を踏まえまして、事務局で整理させていただきながら、次回、またご議論を深めていただければと思っております。
　今後の日程等につきましては、別途、ご連絡をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。
　また、本日の議事録につきましては、ホームページで公開させていただきますので、ご了承の程、よろしくお願いいたします。

それでは、昼食を用意させていただいておりますので、準備させていただきます間、しばらくお待ちください。

以上をもちまして、第２回会議を閉会させていただきます。本日は、お忙しい中、どうもありがとうございました。

以　上